

新翻訳事業

Standard 標準となる日本語訳聖書を求めて



2012年夏に開かれた全体会議。翻訳者と教会の代表者が集まった。

日本聖書協会が2010年に新しい翻訳事業を開始して3年余り経ちました。同年発行のソア35号で本事業開始にいたる経緯や概略についてご説明しましたが、今号では、本事業の特徴と翻訳作業上の困難な側面をお伝えします。新しい日本語聖書をご理解いただくとともに、ぜひご期待ください。 —編集部

新翻訳事業の特徴

このたびの翻訳事業には「新しい」という言葉がついているので、『新共同訳』とはまったく違う新しい翻訳なのだ、という印象を与えています。しかし実際は、『口語訳』や『新共同訳』を中心に、過去の翻訳の労苦や業績の上に立った翻訳であり、ゼロから訳す翻訳ではなく、その集大成とも言えるものです。では、今回の翻訳事業は過去の邦訳聖書、特に『新共同訳』とはどこが違うのでしょうか。

『新共同訳』は、日本語としての自然さと分かりやすさを目指しました。この点ではたいへんすぐれた翻訳で、専門家からも良い評価を受けています。しかし、その反面、「冗長な箇所が多いので、リズムのある文章、教会での朗読にふさわしい、格調ある美しい文章にしてほしい」という要望が多いのも事実です。そこで、『新共同訳』の良さを保ちながら、よりしまった、より美しい邦訳聖書を生み出したいというのが、今回の事業の最大の特徴と言えます。

その目標を達成するために、いくつか新しい方法をとっています。

①原語担当者日本語担当者の二人三脚

今までは、聖書原語を理解する方々を中心に翻訳がなされ、それを最終的に日本語の専門家